



2012 年 9 月

01

今にしてなほ出来る唯一の事は、フィクションの上で、時代を異にした二人の詩人を面晤せしめることである。

「藉すに少許の時を以てしたなら、僕がふたりをお引合せして上げませう。」

すれちがう人

「木下杢太郎」

一 「市街を散歩する人の心持」に感応する若き詩人、木下杢太郎

木下杢太郎（一八八五～一九四五）は明治のなかばに生まれ、第二次世界大戦の直後に亡くなった詩人です。また、本名の太田正雄^{おおた まさお}としては医学者であり、六十歳でなくなったときには東京帝国大学医学部の教授でした。大正五年（一九一六）三十二歳のとき、南満洲鉄道会社経営の南満医学堂教授兼皮膚科部長となったときから、文学史的には、傍系の人という扱いをされます。文藝は余技の人ということになるのでしょうか。筆一本で立つ文学者とは違う位置に立ちます。東京という文学空間から離れ、三十歳代のほとんどを中国や欧米で過ごし、四十歳代は名古屋や仙台の医学部教授として過ごしたため、東京の文壇とは離れた位置に居続けたということも、杢太郎を否応なく傍流の人にさせたようです。五十歳代に東大医学部の皮膚科教授になるのですが、戦時体制が進むなか、それがよい選択であったかどうかは疑問が残ります。その後も東南アジアに積極的に出かける、コスモポリットでした。そうした立ち位置のせいか、日本文学の世界では孤立しているという印象が強い存在です。

とはいえ、二十歳代の杢太郎は、北原白秋ら以上に未来を担う詩人として期待を集めていました。森鷗外の小説『青年』の医学生・大村莊之助のモデルは杢太郎だとされます。最初の小説集『唐草表紙』には森鷗外と夏目漱石の二人が序文を寄せていて、次世代のエース格でした。

明治四十三年（一九一〇）の「市街を散歩する人の心持」というエッセイで、都市をブラブラ散歩して、都市のつくりだす「官能の雑り織る音楽」をあげわうことの楽しみを語る二十歳代の杢太郎は、まさに都市生活の「情調」をうたう詩人でした。この少し軽薄な「情調」はドイツ語のシュティムmung (Stimmung) の翻訳です。英語だと「mood」や音楽の「tuning」を表す言葉です。杢太郎は変貌する大都市・東京から消えつつあるもの、そして新たに生まれようとしている「情調」を五感でとらえようとした詩人です。ただ、現在、その詩がわかりにくくなっているのも確かです。単純にいうと、杢太郎がうたった明治四十年代から大正の街の響きや光景が私たちから遠くなってしまい、同時代なら当然の細部が難解さとなり、脚注がないと読むことが難しい詩に

『其國其俗記』書影 右の少し背が高いほうが昭和14年の初版。左が昭和17年の第二刷。昭和十四年の第一刷は四六判で若干縦に細長く、昭和十七年六月の第二刷はB6判で若干平べったい判型になっています。文字組は同じ版が使われています。

書籍の活版印刷では、白井赫太郎の精興社でなくては嫌だという作家さんたちがいた時代もありました。『其國其俗記』の印刷も、精興社です。小説家・演芸研究家の安藤鶴夫は、『其國其俗記』が出版された頃、精興社に勤めており、そのときの思い出を、エッセイ集『ごぶ・ゆるね』中の「精興社とのつながり」で書いています。そこで、斎藤正雄という社員が『其國其俗記』の背に貼る題簽の和紙の、その貼る位置を精緻に決めている仕事ぶりを書き残しています。この斎藤正雄さんは戦死したそうです。安藤鶴夫は「だから、わたしは、いまでも、古本屋で、〈其國其俗記〉をみつけるたびに、わざわざ、奥附をしらべて、初版であるか、どうかを確かめ、改めてまた、その背張りの位置を、たしかめる」と書いています。



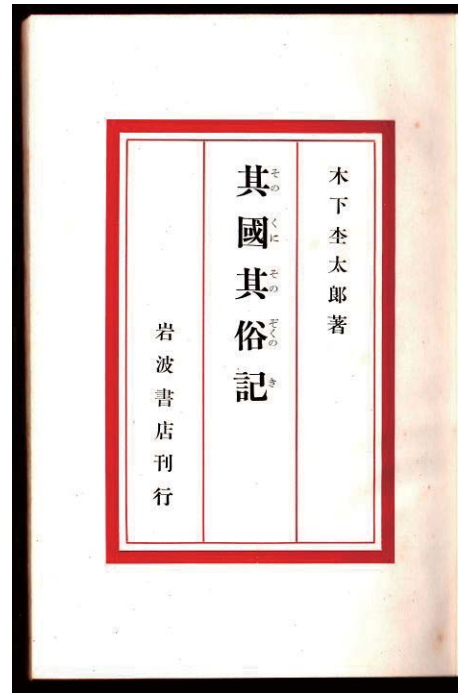
なってしまっているからです。それだけが原因ではありませんが、抒情詩として現在の読者の心にしみ入る力が弱い詩作品群になってしまったという印象も否めません。

二十歳代の木下太郎は、確かに日本文学の期待の存在でした。しかし、木下太郎は、大正五年（一九一六）中国奉天の病院に職を得たときに、その期待の場所から退場します。群衆から離れて、ひとりたたずんでいる後ろ姿の男。「離見の見」で、ものごとを外側から見ることが出来るのだけれども、そのために孤独になっている、そんな存在になっていきます。

とはいえ、一般受けする存在とはいえませんが、「詩人」後の木下太郎には熱心な読者がついています。例えば、三島由紀夫、澤柳大五郎、加藤周一、富士川英郎、野田宇太郎、杉山二郎、岡井隆といった人々です。この旧制高校の男子校的な教養主義が似合う面々から、木下太郎がどういう存在か類推できるかもしれません。個人的には、澤柳大五郎を心酔させたということだけでも、木下太郎は何か持っている、大した文学者だったと思います。

現在、文庫化されて入手しやすい木下太郎作品に岩波文庫版の『百花譜百選』がありますが、精選した随筆集は、いまだ文庫化されることがありません。残念な話です。そのテキストには、未開の鉱脈や水脈がまだ眠ったままで、放置しておくのは惜しい存在です。

『其國其俗記』第一刷の箱 背は日に焼けて、題簽の染料系の赤は退色したものが多い。



『其國其俗記』第一刷の扉

二 『其國其俗記』の「クウバ紀行」

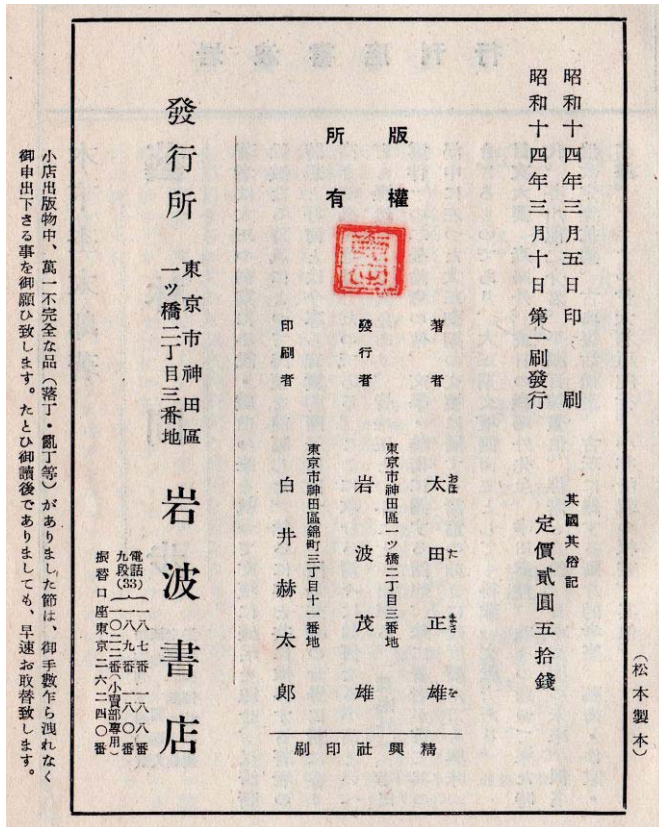
今回とりあげる一冊は、『其國其俗記』です。昭和十四年に第一刷が刊行され、昭和十七年に第二刷がでています。奎太郎が三十歳代から四十歳代にかけて訪れた、アメリカ、キューバ、イギリス、フランス、ドイツ、エジプト、イタリア、スペイン、ポルトガル、中国、シヤム、マカオ、シンガポール、フィリピンなど世界各地の紀行文をまとめた、どちらかというとスケッチ風の軽い読み物です。『其國其俗記』というタイトルは「そのくにそのぞくのき」と読むのですが、なかに「のぞく」が隠されていますので、物見遊山の雰囲気もあります。この本を読み解きながら、木下奎太郎という存在の持つ可能性を押し広げる試みを、正攻法ではなく、かなりトリッキーなやり方になるかと思いますが、試してみたいと思います。

三島由紀夫は昭和三十四年（一九五九）の『文章読本』の「六 最も美しい紀行文とはどんなものか」で、理想的な紀行文として木下奎太郎の文章をあげ、次のように書いています。

この文章読本で紀行文に言及する余裕がありませんでしたが、私がいちばん美しい紀行文と信ずるのは、木下奎太郎氏の文章であります。私は文章によって見知らぬ他国にここがれ、その国に行っても、木下氏の文章を通じて物を見てゐるやうな感じさへしたのであります。

午後一旅館の食堂に午餐して、そして同氏を訪ねべく街衢を探し歩きました。午時の街道はホセ・マリヤ・エレヂヤが詩句の如く激烈且つ閑寂で、鮮碧の蒼穹を支配する太陽の威力が卵色の建築を壓迫し、狭い歩道に海洋の如き濃緑の陰を流します。繁瑣な裝飾の鐵格子の門を入ると、狭い前庭の後ろに石を敷いた廣い客間が開ける。クウバの家には必ず明取りの中庭があつて、家の各室の門戸はそれに向つて開かれます。そして庭には各種の椰子樹、葉蘭の如くにして波形の模様ある千歳蘭、又は紅紫色美しきクロト

『其國其俗記』第一刷の奥付 著者名として、木下奎太郎でなく、本名の太田正雄（おほたまさを）を使っています。



ン、時として桂樹^{けいじゆ}を植ゑます。カナリヤ、文鳥等が緑油漆の飾籠の裡に飼はれて居ます。午日は壁面或は樹葉にその金髪を投げて、空想的な光彩で中庭がきらきらすると、全くアラビア夜話の幻想が實現したかの感を抱かせます。（「クウバ紀行」）

このとき、三島が急ぎ足でなく、より詳細に解説していたなら、その後、もっと奎太郎の紀行文が読まれるようになっていたのではないかとも思いますが、三島由紀夫の推薦にもかかわらず、現在ではあまり読まれていないようです。絵に描いたようにエキゾチックで濃密な文章で、現在主流の、情報優先で軽く中性的な紀行文からは最も遠いところにある文体です。

三島が絶賛した「クウバ紀行」は『其國其俗記』の巻頭に収録されています。奎太郎の大正十年（一九二一）から大正十三年（一九二四）までの四年間の欧米体験の中で、このときのキューバ体験は、最も快い訪問として記憶されています。大正十年（一九二一）七月中旬から約二週間キューバを訪れた奎太郎は、そのサンチャゴ・デ・ラス・ベガス（Santiago de las Vegas）の農学校訪問のことを「クウバ紀行」（初出は「明星」大正十年（一九二一）十二月で、そのときは「玖瑪紀行」という標題）と「サンチャゴ・デ・ラス・ベガス」（初出は「セラルパン」昭和七年（一九三二）八月）で、二度にわたって繰り返し書いています。

実は、このテキストには、奎太郎自身が意図したものでありませんが、その場に「詩神」^{ミユウズ}が居合わせて演出したような偶然の出会い——というよりも出会い損ね——があつて、ありえたかもしれない文学的挿話として、とても魅力的なものでありながら、今まで花を咲かすことのなかった種子が隠れています。

そもそも奎太郎がクウバ（キューバ）を訪れようと思ったのは、「わたくしはクウバで多分、亞刺比亞夜話に出て来る五色の魚のやうに、緑、紅、紫等の斑点できらきらして居る人間の皮膚の疾^{やまひ}をも見るでせうし、醫師ドウバンの秘籍に載せられてもあるべき不思議な毒草をも採集することが出来るだろう」（「クウバ紀行」）と考えたからです。ここでは科学者の好奇心とともに、詩人の好奇心——玉虫色にメタリックに輝くものや魔法への夢想——が同居しています。一九二九年に抗生物質のペニシリンが発見され、

『其國其俗記』第二刷の奥付 国による出版統制がはじまっているので、出文協（日本出版文化協会）の承認番号があり、配給元として日本出版配給会社が入っているようにになっています。部数の揭示がされるようになり、当初 2000 部の予定が 3000 部に増えています。定価の下「マル停」は昭和 14 年公布の価格等統制令で値上げを停止された品を示していて、第二刷の定価も、第一刷と同じ 2 円 50 銭です。昭和 16 年末に中央公論社から『木下杢太郎選集』が出版されたのですが、編集者の松下秀麿によると、『私の手がけた「木下杢太郎選集」は、「児島喜久雄の装釘で、濃緑の匣に入り、当時としては稀な部厚い一冊となって、十七年一月に世にでた。世評は上々で、定価は高かった（注・5 円 50 銭）が、三千部たちまちなくなり、千部を増刷するという状態であった。杢太郎は、「僕の本でこんなことははじめてだよ。ふしぎだね」と、近來ない快心事のように見受けられた』とあり、杢太郎の書籍のおおよその出版部数を知ることができます。戦争が進むなか、真っ当な感覚を持つ人のみが出せる「軽さ」が求められていたのかも知れません。

な空の前にめらめらと輝きました。

コス樹の鉢が其床に散亂してゐました。

折から雨が沛然とやつて来て、高き「フランボワイヤン」樹の火のやうに紅い花が、眞黒

学校の構内に建てられた、木造一階の極めて單純なバンガロ風の家でした。

が精しいから家へ來給へ」と云つて、わたくしを自分の住居に連れて行きました。

わたたくしは其人に紹介せられ、そして其人は「自分の妻は植物學者で、君の質問の事は妻

はわたくしの會はうと豫期して居た、此農園の所長で Dr. Galvino という人でした。

て、わたくしは再會を約して歸らうとする時に、一人の老人がやつて來ました。そして其人

はわたくしの會はうと豫期して居た、此農園の所長で Dr. Galvino という人でした。

のやうにがらんとした廣い研究室で一時間ばかり調べものをしました。

Merino Crenata といふ漢子でした。そして二人して農學校に往つて、物置

た青年が玉突臺から離れて出て來ました。それがわたくしの紹介せられた

一人の青年と道連れになり、言葉は通じませんでした。農學校の助手に對

する紹介者の上書を示すと、ずんずんわたくしを案内して行つてくれました。

彼は何とかと朗かな名を呼んで内に入ると、一人の短い袴に長い襪をした

農學校を捜し出すのにはそんなに困難を感じませんでした。停車場から

一人の青年と道連れになり、言葉は通じませんでした。農學校の助手に對

する紹介者の上書を示すと、ずんずんわたくしを案内して行つてくれました。

彼は何とかと朗かな名を呼んで内に入ると、一人の短い袴に長い襪をした

農學校を捜し出すのにはそんなに困難を感じませんでした。停車場から

一人の青年と道連れになり、言葉は通じませんでした。農學校の助手に對

する紹介者の上書を示すと、ずんずんわたくしを案内して行つてくれました。

彼は何とかと朗かな名を呼んで内に入ると、一人の短い袴に長い襪をした

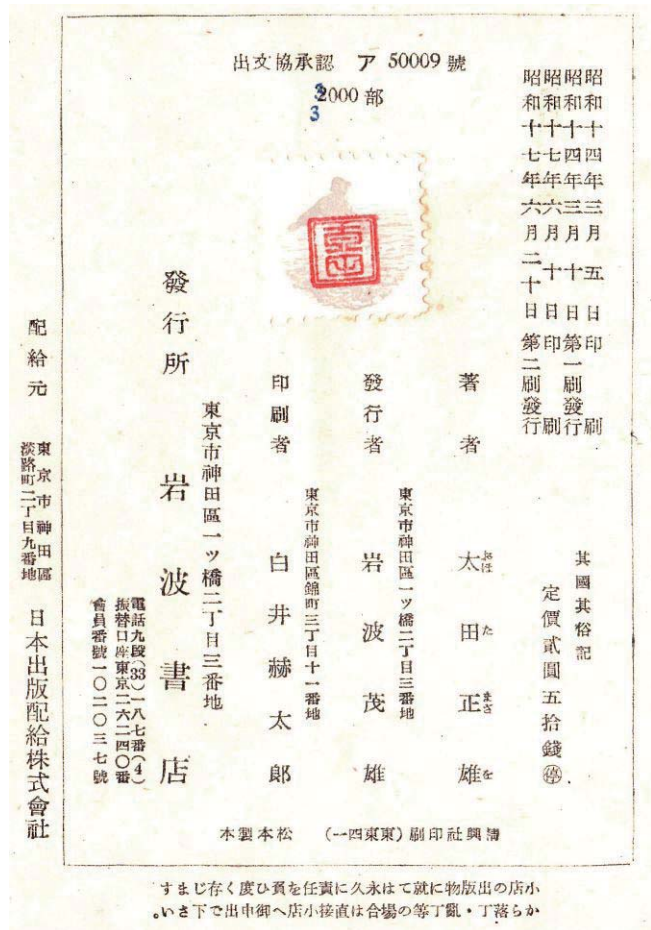
農學校を捜し出すのにはそんなに困難を感じませんでした。停車場から

一人の青年と道連れになり、言葉は通じませんでした。農學校の助手に對

する紹介者の上書を示すと、ずんずんわたくしを案内して行つてくれました。

彼は何とかと朗かな名を呼んで内に入ると、一人の短い袴に長い襪をした

農學校を捜し出すのにはそんなに困難を感じませんでした。停車場から



『其國其俗記』の箱

第一刷（右）・第二刷（左）
残念ながら、箱の背は退色
しているものが多いです。



『其國其俗記』第一刷の表紙

題簽の鮮やかな赤は、「クウバ紀
行」で描写されるフランボワイヤ
ンの花の赤を反映しています。



夫人が嘗て伊太利亞羅馬の植物苑に學んだ時のことを話しました。そして首を傾けた後、其時の同學であつた村岡さんといふ日本の學者の名を思ひ出しました。その響が始めはわたくしに解し兼ねました。やがて然しそれはアクサンの爲めであつて綴りに間違のないことが解りました。

「貴方は御存じですか」と尋ねました。

「わたくしは知りません。然しヌウ・ヨオクに歸れば、多分その人の住所を尋ね出すことが出来ませう。若し尋ね當てたならば、貴君のことを報じませう」と云ひました。

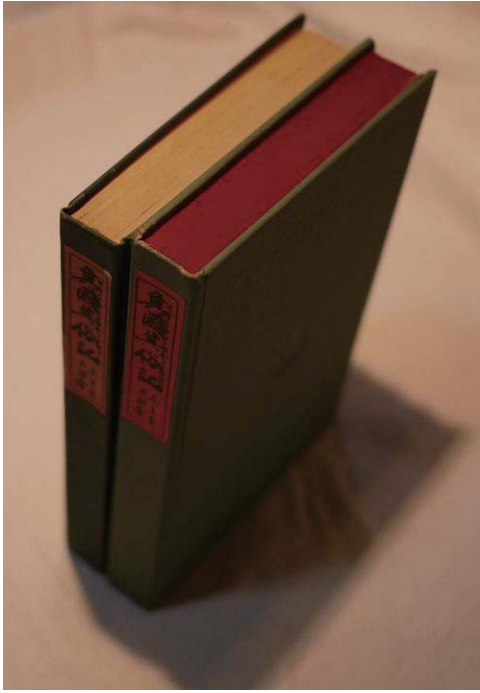
伊太利亞の酒があるからと云つて、博士は一個の酒瓶を取り出して來ました。（わたくしは感じました。此地でわざわざ伊太利亞の酒を飲むといふのは、やはり昔、留學した伊太利亞の好聯想の爲めであるだろうと。）彼等の極めて低き落付いた話し聲（英語と佛語とを混用したる）、緑深き農苑のうちのバンガロオ、夏午後の驟雨、殊に如何にも異郷らしい熱帯の異郷——それ等の要素が、わたくしをして自分は子供の時に見たばやけた歐羅巴風景の寫眞、その中の一人の人物に今なつて居るのではないかと疑はしめました。

雨が霽れて後主人はわたくしを裏の植物園に連れて行つてくれました。破れた木戸の扉を開けて入ると、ここにはハバナ市の植物苑よりは廣い植物苑と農苑とがありました。數多き異樹珍草の中には、竹の屬、椰子又ココス樹の屬が目立ちました。雨に濡れた厚い長大の葉を着けた、フィクス屬、マニヨリヤ屬の大樹は極めて爽快の感じを與へました。確かに日本から移入したらうと思はれる桐樹、桑、枇杷等もありました。そして印度及びメキシコからの珍らしい樹。その間には色鮮かなる各種の花が咲き亂れて居ました。そして皆重い雨の珠を負うて、ふすふすと香氣を發散して居ます。

學校の玄關側の鎌型の臺で、靴底の濡れた土を掻き落して、そして我我は別れました。わたくしは農苑の馬車に送られて停車場に歸りました。（七月廿四日）

（大正十年十二月「明星」）

文学好きなら、ここに登場する人物の名前にびんとくる方もあるでしょう。奈太郎が描写する「一人の老人」「此農園の所長」の「Dr. Calvino」という人物です。この「Dr. Calvino」は、



第一刷の天は赤く染められています。

二十世紀イタリアの国民的作家イタロ・カルヴィーノのお父さんです。そして「伊太利亞羅馬の植物苑に學んだ」夫人はイタロ・カルヴィーノのお母さんです。

十一年後に改めて書かれた「サンチャゴ・デ・ラス・ベガス」からも、同様の場面ですが、変奏を味わいつつ引用しましょう。

此日、僕は午後少し遅くやつて來たので、農學校に着いて何もせぬうちに日暮になつた。それで又出直して來ようと思つてゐる所へ一人の老人がやつて來た。それが其農學校の長で Doctor Calvino といふのであつた。その人が僕の來意を聽いて、僕の妻は植物學者で、君の質問の筋は妻の方が詳しいからうちへ來たまへと云つて僕を自分の家へ連れて行つてくれた。

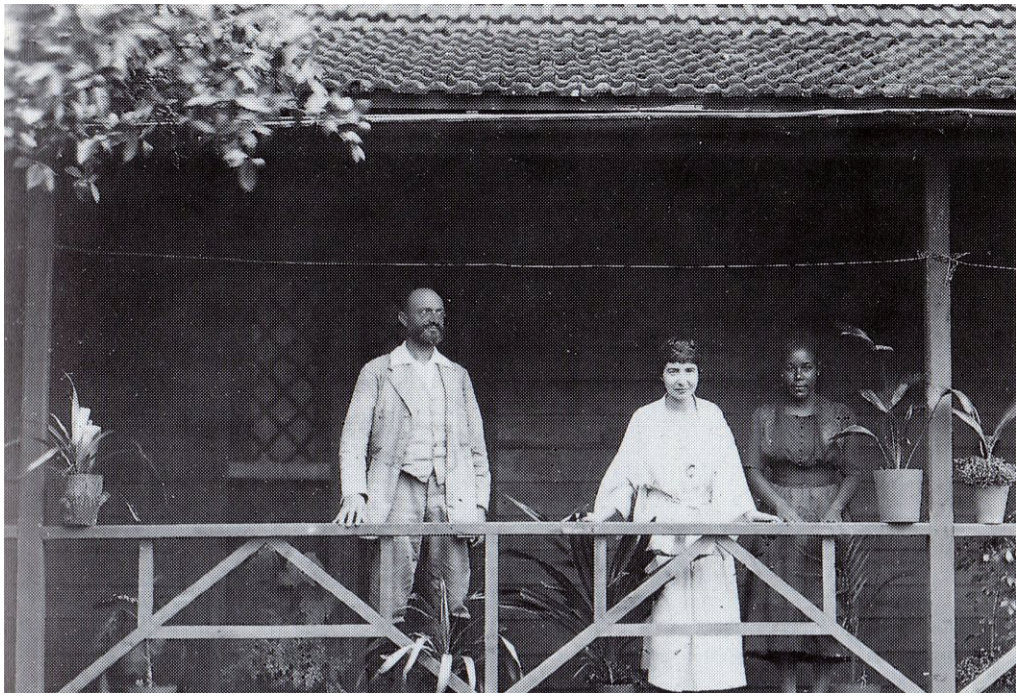
さして廣からぬ木造一階建の其寓居は農園のうちに建てられてあつた。低い木戸を越えて其客間らしい一室が見られる。廊下の軒には葛がからみ、庭にはいろいろの椰子屬の矮樹の鉢が散亂し、またクロトンの様々の色の葉が発生してゐた。屋根から庭へとかけ渡した天幕には紅緑の色の筋も見えて、印象派の繪心がある。

その廣い廊下では、卓に綺つて、さう年更けたとも見えぬ夫人が本を讀んでゐた。僕はその夫人に紹介せられた。顔の褐色な下婢が茶を運んで來た。

その時、忽ち沛然と大雨が降つた。空がまつくらになつて、丈の高い「フランボワイヤン」の紅い花が火のやうに輝いた。(樹の形は合歡花の太木を想はせるやうなものである。)その下には一處その花が落ち散つて、鮮血の如く氣味悪く地を染めた。

夫人は伊太利亞羅馬の植物苑で學んだ時の話をした。その時の同學に日本人の村岡といふ人があつたといつた。僕は後にヌウ・ヨオクに出て、この人のことを尋ねたが誰も識つてゐる人がなく、夫人の言傳を告げないままで、今に至つてゐる。

伊太利亞の酒があるからと云つて、主人は僕の爲めに奥から一個の瓶を携へて來た。ベルモットのやうな酒であつたと覺えてゐるが、長くクウバに住んでゐる人の身になれば壯年會遊の歐羅巴が懐かしいのであらうと同情した。



キューバのサンチャゴ・デ・ラス・ベガスのカルヴィーノ夫妻（“ALBUM CALVINO” Mondadori 1995）木下杢太郎の描写した「顔の褐色な下婢」は右端に写っている女性でしょう。「一人の老人」と描写された Mario Calvino は左、「さう年更けたとも見えぬ夫人」Eva Mameli Calvino は中央に。テラスには「各種のココス樹の鉢」が散乱してます。背景の「木造一階の極めて単純なバンガロオ風の家」「緑深き農苑のうちのバンガロオ」でイタロ・カルヴィーノは生まれます。全く別の所にそれぞれ存在していた杢太郎の文章とカルヴィーノ家の写真の照応は「子供の時に見たばやけた歐羅巴風景の寫眞、その中の一人の人物に今なつて居るのではないか」という杢太郎の幻影を、より入り組んだものに変えていきます。

『ALBUM CALVINO』という、イタロ・カルヴィーノ没後十年にカルヴィーノの版元である Mondadori から出版された伝記に「サンチャゴ・デ・ラス・ベガス」の写真も何枚か載っています。杢太郎の言う「木造一階の極めて単純なバンガロオ風の家」「緑深き農苑のうちのバンガロオ」の前に立つカルヴィーノ夫妻の写真も残っています。

「顔の褐色な下婢」は右端に写っている女性でしょう。「さう年更けたとも見えぬ夫人」が中央。「一人の老人」が左に立っています。

「緑深き農苑のうちのバンガロオ、夏午後の驟雨、殊に如何にも異郷らしい熱帯の異郷——それ等の要素が、わたくしをして自分は子供の時に見たばやけた歐羅巴風景の寫眞、その中の一人の人物に今なつて居るのではないか」と杢太郎が白日夢を見るような心持ちになった、この場所で、イタロ・カルヴィーノは生まれます。このバンガロー前のテラスに杢太郎も立っていたわけです。

杢太郎が描く夫妻と、イタロ・カルヴィーノ関連の書籍から知ることのできる夫妻の姿とは、若干違いがあります。このときの三人の年齢は、杢太郎が明治十八年（一八八五）八月一日生まれで、訪問した大正十年（一九二一）七月に満三十五歳。「一人の老人」Mario Calvino は、一八七五年三月二十六日生なので、満四十六歳。「さう年更けたとも見えぬ夫人」Eva Mameli Calvino は一八八六年二月十二日生なので、満三十五歳で杢太郎と同年です。

実は、Calvino 夫妻は前年の一九二〇年に結婚しているので、杢太郎と会ったときは実は新婚さんです。研究者同士の結婚で晩婚ではあるのですが、これから二年後に最初の赤ん坊に恵まれる夫婦で、杢太郎が描く老夫婦のような姿は詩人の演出が入っているような気がします。「長くクウバに住んでゐる人の身になれば壮年會遊の歐羅巴が懐かしいのであらうと同情した」とあるように、杢太郎は、夫妻が地元の人と考え、イタリアからキューバに来ている研究者夫婦だとは考えていなかったようです。昔ヨーロッパに留学したことを懐かしみながら、熱帯の地で自分の内生活に沈湎してゐる老夫婦という「絵」で、杢太



キューバのカルヴィーノ親子

p.8の写真は、Sanremo の Archivio Moreschi 所蔵。p.9の写真は、Roma の Archivio Calvino 所蔵。Luca Baranelli e Ernesto Ferrero 編の『ALBUM CALVINO』(Mondadori, 1995) より。

郎はこの夫妻を描いています。

夫人と同僚の村岡という日本人留學生のことも気になります。のちに李太郎の吉利支丹文学研究に協力する、歴史学者・村岡典嗣も欧州留学をしているのですが、大正十一年（一九二二）から大正十三年（一九二四）の間ですので、別人です。さらに調べていくと、別の挿話・逸話が埋もれているかも知れません。

李太郎が、イタロ・カルヴィーノの誕生した一九二三年にキューバを訪れていたなら、話はより劇的になったのでしょうか、そのイタロ誕生の年には、李太郎はフランス・イタリア・ドイツ・エジプトなどを転々としています。イタロが生まれた十月には、ソルボンヌ大学のランゲロン博士との共同研究、糸状菌分類法の研究を完成させています。

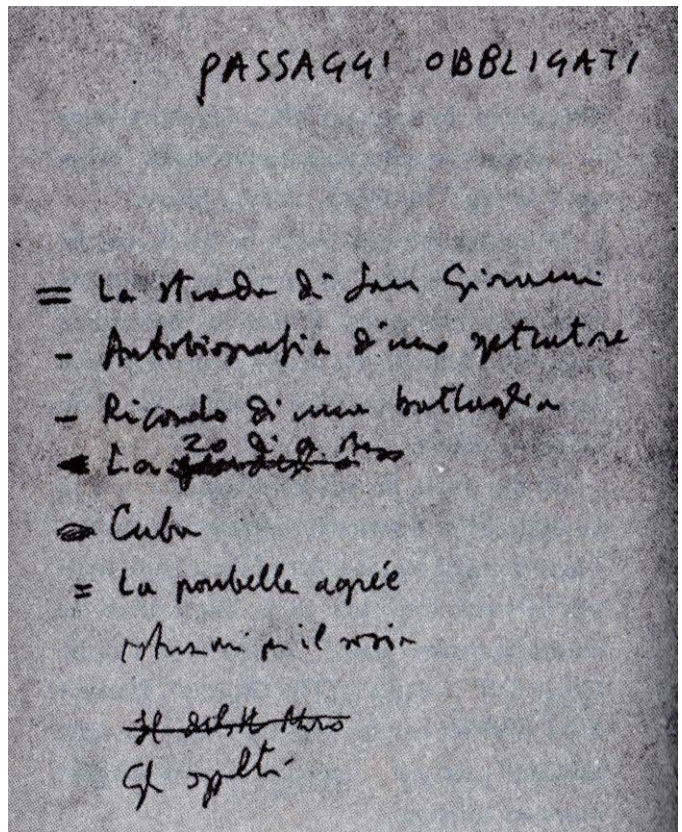
李太郎が誕生を知ることのなかったキューバ生まれの赤ん坊がどんな存在か、改めて簡単に説明すると、イタロ・カルヴィーノは二十世紀イタリアを代表する作家、イタリアの国民的作家といえる存在です。『まっふたつの子爵』『木のぼり男爵』『不在の騎士』から構成される『我々の祖先』

三部作や『イタリア民話集』など、日本でも多くの作品が翻訳されています。

李太郎は六十歳、イタロ・カルヴィーノは六十一歳という年齢で亡くなっています。二人とも実りある老年の可能性を見ないまま亡くなった作家です。そこにも共通性があります。イタロ・カルヴィーノは、両親のことをあまり書き記していません。たぶん、これからの主題だったのかもしれない。

イタロ・カルヴィーノの没後に見つかった創作メモに、作品集の仮目次があり、それから推測すると、「Cuba」を題材とした作品を書く意思があったようです。その作品は書かれないままでしたが、そのメモをもとに、『サン・ジョバンニの道』という作品集を、夫人のエステルが編んでいます。残念ながら、そのなかには「Cuba」についてのテキストはありません。イタロがキューバにいたのは誕生してから、両親

イタロ・カルヴィーノが生前に残していた作品構想メモ『Passaggi obbligati (強いられた道)』と題された作品リストの中に「Cuba」というタイトルが見えます。イタロ・カルヴィーノの夫人エステルが、このメモをもとに、1990年、『La Strada Di San Giovanni (サン・ジョヴァンニへの道)』という作品集を編集し出版しました。残念ながら、その作品集の中には、キューバに関する記述、キューバを描いた作品は含まれていません。イタロ・カルヴィーノの「Cuba」は生前執筆されることはなく、構想だけが存在したテキストでした。[図版は、Italo Calvino 著、Tim Parks 訳の『THE ROAD TO SAN GIOVANNI』(PANTHEON 1993) より]

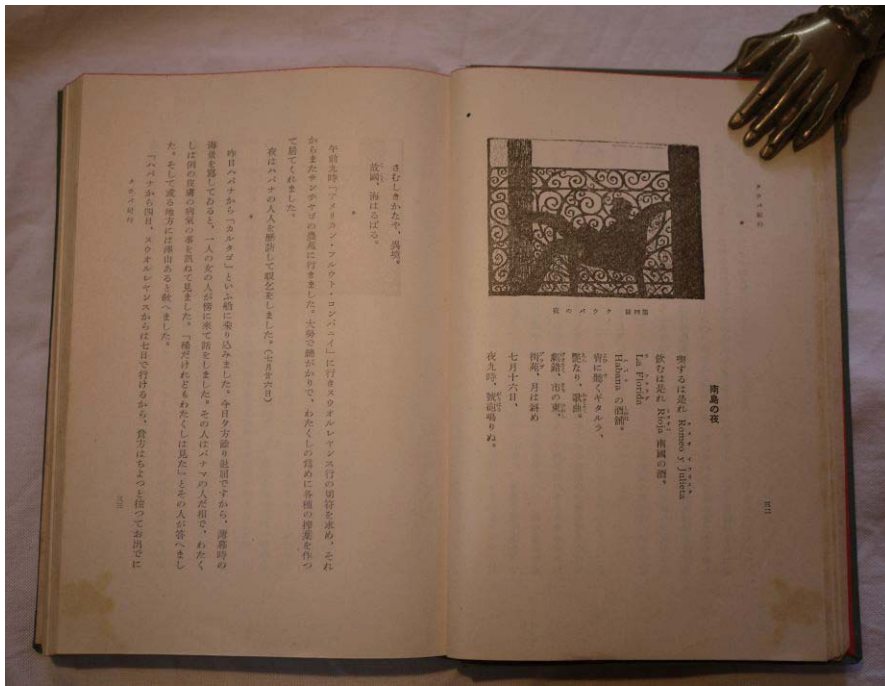


がイタリア・サンレモの植物園に転職する一九二五年までの短い期間ですから、本人の記憶には残らなかったと思います。そんなカルヴィーノは、どんなテキストとして「Cuba」を構想していたのでしょうか。

イタロ・カルヴィーノが生まれたキューバのサンチャゴ・デ・ラス・ベガスのパングローを日本の詩人、木下柰太郎が訪れていた、という挿話は、偶然にせよ、天恵のような偶然です。「もしも」を言い始めたらしきありませんが、この事実をイタロ・カルヴィーノが知っていたら、あるいは構想していた「Cuba」が大西洋だけを結ぶ作品でなく太平洋まで想像力を広げる作品として実を結んでいたのではないかと空想します。ある情報があれば、複数の点と点が連鎖的に触手を結んで、ありえないような物語に一気に結実する寸前の状態だったともいえます。

カルヴィーノは、一九七六年に日本を訪れていて、その時の体験から魅力的なエッセイをいくつか残しています。最も印象的なのは、東京駅の新幹線のホームで見かけた頭を紫色に染めた老婦人が若い娘にかしずかれている様子を描いたエッセイ「紫色の着物の老婦人」で、その紫色から紫式部への連想を誘っています。そうした作品の連なりに、柰太郎のキューバの挿話が加わった可能性もあったわけですが。

さらに柰太郎とイタロの二人を結びつける触媒になる詩人も存在します。このテキストの冒頭に、「今にしてなほ出来る唯一の事は、フィクションの上で、時代を異にした二人の詩人を面晤せしめること」という木下柰太郎のことばを引用しましたが、ここで語られる二人の詩人は、ポルトガルの文学者エンシウラウ・デ・ムライイシユ (Wenceslau de Moraes、ヴェンセスラウ・デ・モラエス) と連歌の宗祇です。そしてまた、あつらえたような偶然ということでしょうか、カルヴィーノもまた、桂離宮についての「千の庭」というエッセイで、千利休が生け垣で海の眺望を隠した庭を設計した理由を説明するとき宗祇の句を使ったという逸話に言及して、宗祇の句「海すこし庭に泉の木の間かな」を引用しています。宗祇という結び目でも、カルヴィーノと柰太郎が結ばれます。万葉や平安の歌人でもなく、江戸の俳人でもなく、中世の連歌師というところも、この二人にふさわしい選択なのかも知れません。偶然の戯れの連続には違いないのですが、なん



『其國其俗記』中の「クウバ紀行」のページから 木下杢太郎が「クウバの夜」という挿画を寄せています。

だか三題断か何かのように、舞台の準備が進んでいきます。

杢太郎の「クウバ紀行」では、満開の紅い花を咲き誇るフランボワイヤンの樹の描写が印象的ですが、それが能舞台の松の役割を果たす詩劇が成り立つような気がします。舞台を組み立ててくれと「詩神」が招いているのです

世界的な観点から、わたしたちはいろいろなすれ違いに気づくことがあります。それ自体は起こらなかったことですから、そのことをどう言うことは、まったくの無意味な遊技行為です。それでも、わたしたちを夢想させる力があります。歴史小説などは、その夢想が推進力になっているジャンルかも知れません。

いずれにせよ、すれ違いというものはドラマチックなものですから、別に文学的交流があったわけではない二人ですが、偶然にせよ、お互いを結びつけるものがあったという縁は、やはり遅ればせながらであっても結んでおいたほうがよいのではないかと思います。アネクトド好き、挿話・逸話好きとしては、カルヴィーノの生前に、杢太郎のことを知らせる人がいたらと、残念に思います。機会は失われていたわけです。

「クウバ紀行」が最初に発表されたのが大正十年（一九二一）ですから、それから九十年、これも杢太郎とカルヴィーノの奇縁に言及せず、すれ違ったままにしてきたわけです。あるいは、このことも日本の詩人知識人の孤独を象徴的に表しているのかも知れません。

三 東京駅の詩劇

キューバだけでなく、杢太郎、イタロ・カルヴィーノ、宗祇らが織りなす舞台の背景になりえそうな、また別の挿話があります。カルヴィーノが頭を紫色に染めた老婦人が若い娘にかしずかれている様子を見たのは東京駅の新幹線ホームだったのですが、東京駅は杢太郎の重要な作品の舞台にもなっています。



高橋英夫選『読書清遊 富士川英郎随筆選』（講談社文芸文庫 平成22年）

『読書清遊』に収録されている「木下杢太郎の随筆」（昭和59年）のなかで、富士川英郎は、木下杢太郎の小さなアンソロジーを夢想し、「小学校時の回想」「すかんぼ」「僻郡記」「残響」「研究室裏の空想」「本の装釘」「あかざ（藜）とひゆ（菟）」の七篇を選んで、次のように述べています。

私はこの七篇を、右に列挙した順序で並べた一冊の随筆集の出現をしばしば夢想しているが、これらの随筆は、杢太郎がその幼時を回想したもの、晩年の学究生活の日々を語ったり、自家の庭や、大学の構内などで見かけた草花について述べたりしたものが、その大半をしめている。しかもそれは、博大な学識と、静かな思索と、繊細な詩情が、そこで渾然と一つに溶けあっている杢太郎の内部から自ら滲みでたものであるもので、いずれもえも言われぬ味わいの随筆となっているのである。（中略）これは我国に稀れであった一人のポエタ・ドクトゥスの、いわば晩年の生活記とでもいうべきものであるが、頁数にして凡そ百五十頁の小冊子となるだろう。さて、その表題は集中の一篇のそれを採って、『残響』と名づけたと思う。

昭和59年（1984）の富士川英郎の夢想は実現していません。現在、膨大な出版物が毎年、更新されていますが、杢太郎の随筆を文庫のような小冊子で読むことができる、そうした贅沢の余地は無いような現状です。

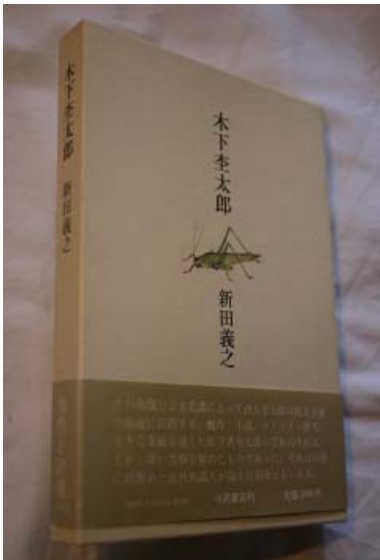
木下杢太郎の最初の詩集『食後の唄』は、詩人としてもっとも得意の時期であった二十歳代でなく、詩が生活のすべてでなくなった三十歳代のなかばに出版されています。

『食後の唄』の詩にはどこか「死に体」の印象があります。正直、現代に生きている詩とは思えない詩に見えるのです。それは詩が書かれた明治・大正の、その背景をなす音や風景を聞き分け見分けられなくなっていることに起因するかも知れないと考えています。都市を散歩する者が通りすがりに見た光景や微かに聞こえる音がもたらす「情調」こそが、杢太郎の詩の主調音になっていて、それに頼りきった詩だったからです。わたしたちは、「失われた時」が目の前にあるのにもかかわらず、その読み方、歌い方が分からなくなっているのです。

しかし、三十歳代のなかばに書かれた『食後の唄』の序文は、今も異彩を放っています。決して現代的なテキストではないのですが、現在の読みに耐える力を持っています。詩集『食後の唄』の序文の書き手は、詩をなかばあきらめた人です。二十歳代の自分の放縦の詩を苦々しく読み返す三十歳代半ばの男の文章です。過去の詩を読み返すたび、顔が赤面するのを押さえきれないのと同時に、それでも過去の自分自身を完全否定しきれず、割り切れない感情が縋い交ぜになっています。そこには、「情調」の詩から違う次元へいけなかった両大戦間の詩人の時代閉塞感も表れています。その縋い交ぜの感情の場所を、杢太郎は旅慣れたもののダンディズムで押し切って、不思議と姿勢のよい、二十代の詩とは一線を画した者のみが書くことのできた希有の序文を書き上げています。こうしたダンディズムは、今の時代、あまり求められていないのかも知れませんが、そこには現代の人がとても体現することができないような、眠れないまま迎えた「早朝」の諦念と晴れ晴れしさがあります。

この序文は、南満医学堂教授兼奉天病院長だった杢太郎が出張で東京に出てきたとき、その東京滞在中に書き上げられました。序文の最後に「大正七年九月四日早朝、東京停車場ホテル七十一號室に於て 作者識す」と具体的に日付と場所を書き記しています。

杢太郎は筆まめな人で、日記が残っています。明治三十四年（一九〇一）から昭和二十年（一九四五）まで、明治四十・四十一年と関東大震災で焼失したらしい明治四十五年（大正四年）のものをのぞけば、ほぼ揃っています。全五巻の『木下杢太郎日記』にまとめられて、岩波書店から出版されています。その序文を書き上げた日前後の日記を読んでもみると、宿泊しているホテル



小沢書店の奎太郎関連書籍

1972年から2000年にかけて存在した小沢書店は、活版印刷で端正な装釘の書籍を出す出版社でした。澤柳大五郎『木下奎太郎記』や新田義之『木下奎太郎』などもその好例です。本の装釘についても見識の高かった奎太郎の趣味と通じるものが感じられます。そうした趣味の良さが継続し得なかったのは残念です。小沢書店の倒産後、経営者だった長谷川郁夫は、出版人・長谷川巳之吉の伝記『美酒と革囊』（河出書房新社 2006）を上梓しています。第一書房の創始者、長谷川巳之吉は、昭和5年（1930）に『木下奎太郎詩集』を出したこともある人物です。この奎太郎的なものの系統を受け継ぐものが、また、どこかに現れるのか、それとも、途絶えようとしているのか、現在はその分岐点にあります。

を訪ねてきたり、会ったりした人々に大正の顔というべき人たちが登場しています。

九月三日（火） 和辻哲郎、長田秀雄、長田幹彦、阿部次郎、石井柏亭

九月四日（水） 小糸源太郎、鍋木清方、谷崎潤一郎、長田

これら多くの人の出入りの流れのなか、早朝の孤独な時間に、詩集『食後の唄』の序文が書き上げられたのかと思うと、感動します。

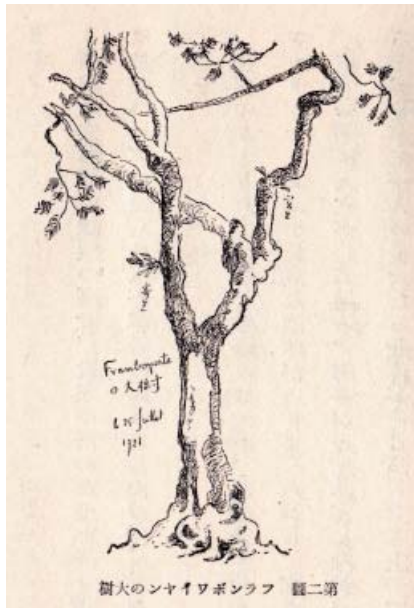
余談になりますが、その九月四日に奎太郎と会っている谷崎潤一郎は、東京ステーションホテルに関わる人と縁がある人物でもあります。谷崎は、十代のとき父親の事業の失敗から、築地精養軒の経営者、北村重昌の家に家庭教師として住み込むことになり、そこから府立一中、第一高に通っています。書生のような待遇で、気位の高い谷崎にとっては屈辱的だったようですし、最後には女性問題を起こして北村家から追い出されることになるのですが、恩人ではあります。北村重昌の築地精養軒が東京ステーションホテルの運営を始めたのが大正四年（一九一五）で、最初の総支配人は北村重昌のもとで働いていた五百木竹四郎でした。谷崎は精養軒に代表されるような明治の洋食や西洋的なホテルを作り出していた人たちの身近で育った人だったわけですが、

谷崎は明治十九年（一八八六）生まれで奎太郎の一つ年下、ほぼ同世代の人です。谷崎潤一郎と木下奎太郎の二人を現在でも読まれているかどうか較べてみたら、読み継がれているのは谷崎なのかもしれません。二人の現在を分かつものは何だろうかと考えると、単純に過ぎるかも知れませんが、テキストのもつ色気みたいなものの差のような気がします。

ところで、奎太郎は『其國其俗記』収録の「アマルフィ」で大正十二年（一九二三）二月イタリアのアマルフィのホテル・ルナ・コンヴェントに泊まったことを記しています。

ヘンリック・イブセンが三箇月かかつてノラを書いたと云ふ部屋（第七及八號、わたくしの室は第十一號である。）がぢきにこのわきにある。それは一八七九年のことであるが、季節は聞き漏らした。多分冬ではなかつたらう。いくらイブセンでも二月の雨の寒さには閉口したらう。わたくしは残念ながらこの地でイブセンにあやかることは出来なかつた。

奎太郎は、わざわざイブセンが『人形の家』を執筆したホテルにまで行って泊まったわけですが、もし、可能ならその第七號室か八號室に泊まりたかつたのではないのでしょうか。このホテルは映



フランボワイヤン「クウバ紀行」の空太郎のスケッチから。サンチャゴ・デ・ラス・ベガスで見たもの。フランボワイヤン（framboyant）は、ハウオウボクといわれるアフリカ・マダガスカル原産の花樹。カエンボク（火炎木）、ジャカラндаと並ぶ熱帯の三大花樹。紅い花を咲かすカエンボクとハウオウボクは火炎樹とも称されます。熱帯地帯の旧植民地に多く植栽されました。

画監督ロベルト・ロッセリーニと女優イングリット・バーグマンのカップルが泊まったことでも有名です。

この歌枕を求めるような振る舞いに倣ったわけではないですが、十年ほど前、空太郎が詩集『食後の唄』の序文を書いた東京停車場ホテルに泊まるのも一興と思い、東京ステーションホテルに一泊したことがあります。フロントで空太郎の詩集『食後の唄』が書かれた部屋のことを尋ねますと、残念ながら、フロントの人たちは空太郎のことを全く知りませんでした。それでも、少し調べてからお電話差し上げますと言われ、東京駅の構内を見下ろせる部屋に入りました。

しばらくして、社史を担当しているという常務さんからお電話いただいて、その方のお名前は忘れてしまったのですが、東京ステーションホテルは大正四年（一九一五）の創業で、明治の精養軒の流れを組むことなど、お話を伺いました。その常務さんは、空太郎が詩集『食後の唄』の序文を東京停車場ホテルで書いたことをご存じなかったのですが、「東京停車場ホテル」は東京ステーションホテルで間違いないだろうという話でした。しかし、そのとき思いがけない話が出てきました。東京ステーションホテルの創設当初から続いている部屋番号のシステムでは、「七十一號室」という部屋は存在したことがないということです。

予想外の話でした。詩集の『食後の唄』の序文に、真実らしくおさまっている「七十一號室」という数字が、まったくの仮構の部屋番号だった可能性があるわけです。もちろん、単に常務さんの勘違いで、大正七年には「七十一號室」は存在していた可能性も残されています。

しかし、仮構の部屋番号であったほうが、何か空太郎らしい気がします。

何も意味しない数字の周りを「詩神」^{ミユク}たちが、ざわめいているようです。因果律を超えて、その出来の善し悪しは別として、あらがいうようななく、偶然の結びつきが絡んできます。素数という以外、特徴のない七十一という数字ですが、ここで、イタロ・カルヴィーノの数学的テキストと空太郎の仮構の部屋番号が交錯する詩劇の別の場面が成り立ちます。あるいは、『七十一號室』というのは、二十歳代の詩に別れを告げる空太郎を主人公とした詩劇のタイトルとして、案外悪くないような気がします。そこでは、カルヴィーノ、イプセン、宗祇、モラエスらの声が交錯し、その背景でフランボワイヤンの大樹がめらめらと輝き、紅い花を咲き散らかしているのです。

《補遺》『其國其俗記』に見られるその他の逸話の種

『其國其俗記』には、カルヴィーノの話のほかに、すれ違い、出会い損ねる事例や、別の逸話・挿話への動線になるような記述を見出すことができます。出会いのチャンスがごろごろ転がっているのに、すっと通り過ぎてしまう。そういう存在に思えてきてなりません。そうした挿話のいくつかを補遺として掲載しておきます。

■ JUNG

大正十年（一九二一）八月、アメリカ東部の都市ボルチモアを訪れたときの記述です。

一昨日當市に着きました。昨日はジョンズ・ホプキンス・ユニヴァシテイといふの見物し、その Abel といふ老教授からいろいろ御世話になりました。多くの日本人がその教室に學び（友人、南滿醫學堂の久保田晴光君もその一人です）、その爲め、日本人には大に親切です。殊に午食の時、教授も、教室、醫局の人人も一緒に食事する大食堂で食事しましたが、實に好い印象を受けました。今日はジョンズ・ホプキンス・ホスピタルといふのを訪ねました。有名な Gilchrist といふ皮膚病學者は旅中で、また紹介を受けた Jung といふ教授も不在でしたから、その教室の助手の手術の見物だけでしたが、四角巾の類を惜しげもなく澤山使ふのを奇異の感を以て眺めました。（一九二二年八月十五日「北米通信」）

「紹介を受けた Jung といふ教授」が不在で出会い損ねたという記述も想像力をかき立てます。精神分析のカール・グスタフ・ユングも一九〇九年以降、何度か渡米していますが、この Jung はカール・グスタフ・ユングではありません。しかし、何らかのつながりのある人の可能性も考えられます。



『新編百花譜百選』と『250 quesiti di giardinaggio risolti』

木下圭太郎の本で、現在もっとも入手しやすいのは岩波文庫の『新編百花譜百選』（前川誠郎編、2007）です。2007年の帯には「創刊80年」とあって、岩波文庫としても気合いの入った記念版アンソロジーです。Eva Mameli Calvino と Mario Calvino の著作も永らく絶版でしたが、2011年に夫妻の共著『250 quesiti di giardinaggio risolti』（邦題をつけるとすると『園芸250の疑問解決』といったところでしょうか）が、ローマの Donzelli Editore から出されています。もとは1940年に出版された本の新版です。圭太郎とカルヴィーノ夫妻の本で、現在入手しやすいものが、ともに戦争中に作られて草木についての本というのは、偶然とはいえ、縁を感じます。

ボルチモアのジョーンズ・ホプキンス大学は、『存在の大きい連鎖』の著者で、「観念の歴史 (The History Of Ideas)」一派の中心人物となったアーサー・ラブジョイ Arthur Lovejoy (一八七三～一九六二) の本拠地です。圭太郎は「観念の歴史」派の人たちとは相性がよさそうなので、何もないまま通り過ぎてしまったのは、何だか惜しい気がします。

また、ボルチモアの子精神科医 Dr. Trigant Burrow が、治療法として「クループ・サイコロピイ」を始めたのが、この一九二一年です。やはり、何かが始まる現場に近いところに現れるのですが、通り過ぎてしまうタイプの人という、圭太郎への印象が強まります。

■ ルノワール三兄弟

大正十二年（一九二三）一月、フランスでの記述です。

それから近くにカアニュがあります。正宗君に聞いて居ましたから、午後そこにルノワールの邸を見にゆきました。同君が去年の冬居られた頃は、ここに人も棲み畫もたくはへてあつたさうですが、順はどうでしたか、三子の内、俳優なる人値は無論巴里に居り、も一人は聯隊に勤め、も一人は今巴里に往つてゐて不在でした。そして残つた繪も去年の夏三人に分配せられ、多くは巴里に運ばれ、今この地には大したものはないと、一人の植木屋が話してきました。去秋バルバサンジュの店でやつたルノワール展覧會の品は、多分この家から出たものが多かつたのでせう。（『羅馬へ』大正十二年（一九二三）一月十日ニイスに於て）

ジャン・ルノワールが映画監督になるのは一九二四年です。

■ ツタンカーメン

大正十二年（一九二三）二月、エジプトでの記述です。

我我が諸王陵に達した時、ちやうど近頃新に新掘を始めて評判になつてゐるツウタンカモンの古墳の入口（といつても井の如く深く掘り下げられてゐる處であつたが）のいはば井桁のやうに高くなつた周縁のところに人人が大勢集まつてゐた。それは主として亜米利加からの観光客であつた。（「テエベス・百門の都」大正十二年（一九二三）二月一日）

ツタンカーメンの黄金の仮面などが発掘されたのは前年の一九二二年。思いがけない場面に現れる才能もあります。

■関東大震災

李太郎は、大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災は、欧州滞在時に知ります。神田三崎町の留守宅の蔵書・原稿を焼失しています。

『其國其俗記』では、関東大震災への言及がありません。一九二三年八月三十一日という震災前日に書かれた「伯林より」と、昭和九年（一九三四）八月の日付のある「チエンマイ」という紀行の間の作品は、「洛陽及び鞏縣」（初出は「セルパン」昭和七年（一九三二）五月）とキューバの体験を再び書いた「サンチャゴ・デ・ラス・ベガス」（初出は「セルパン」昭和七年（一九三二）八月）を除いて、選ばれていません。全く書かないことでのみ、そのことが失われたものを示しているかのようです。意識した選択だったと思われます。

《 ENVOI 》

- 01 「フィクション」 として、カルヴィーノの偽作「Cuba」を構想する。
- 02 木下杢太郎とイタロ・カルヴィーノをワキとシテとして詩劇を構想する。
- 03 未刊行の文庫本『木下杢太郎随筆集』の編集企画準備が必要である。
- 04 九州南部の海紅豆も火炎樹に連なるものと考え、紅い花を咲かす熱帯性の花樹との連携を図る。

2012 年 9 月 22 日



平 田 芳 樹

©HIRATA YOSHIKI 2012